草原地域の生きもの

三瓶山の北側、東側、西側を囲む広く日当たりの良い斜面には、花の咲く低木や草が茂っている。この地域では何百年もの間、放牧により木々の成長が抑制され、この美しい景観により、三瓶山は 1963 年に大山隠岐国立公園の一部として選ばれた。

草原の生態系は森林のそれとはかなり異なり、その風景は四季の移り変わりで劇的に変わる。春には、オキナグサのワインレッドの花が冬の枯草の中で一番に登場する。種から長く白い毛が生え、これが老人の髪のようであることから、この植物の名前は「老いた男の草」を意味する。晩春までには、レンゲツツジの赤い花が草原の中に出現する。牛はこの有毒の花を避けるため、ツツジは山側にのびのびと広がる。

夏には、ウラギンヒョウモンなどが花粉を運び、満開の花が草原をすっぽりと覆う。秋の野原にキキョウやオミナエシの花が点在し、辺りを覆う背の高いススキが、長くふさふさした頭を風になびかせる。ススキの葉の茂みはカヤネズミにとっては天国で、ススキの葉で茂みの中に円形の巣をつくる。虫たちもまた草の中に巣を作り、秋の夜はスズムシとマツムシの鳴き声が響く。東側の草原には、牛の排せつ物を食料にし、その中で卵を孵化させる絶滅危惧種のダイコクコガネがいる。

放牧牛の数が減ったため、三瓶山周辺の森林が徐々に草原へと広がってきている。次の世代へと草原の生態系を維持するためには、季節的な草刈りや西側の草原で定期的に行う野焼きなど、直接人が管理することが継続的に必要となるだろう。